四才児の一日

村石京子

○はじめに「一年前をふりかえって」

その前年は三才児の級であったので、十五名でゆったりと一年間を過してきた。そして四月になって四才児の級になり、三十六名にふえた時の、部屋いっぱい子どもたちの顔でうずまった新学期最初の日の部屋の中の情景が今も鮮明な印象で残っている。うれしそうな顔、はっきりした顔、緊張した顔、心配そうな顔、さまざまな表情で一ぱいであった。

この大勢の子どもたちが幼稚園にきて、家庭にいるのと同じように楽しく、やりたいことを心ゆくまでやり、話したいことを何でも話しあっていく日が一日も早くくるように願ったことを、つい昨日のように覚えている。

まず第一に心の緊張をほぐし、一人ひとりが充分あそべるようにしたい、そしてのびのびと楽しく過せるようになったら、今度は級としてのまとまりをもちたいなどと、いろいろ思いが胸に満ちるのであった。しかし、教師はこういう気持ちで保育にのぞむのであったけれど、それが実現の運びとなった日は、はじめのうちはごく少なかった。

新入の子どもの中に必ずみられることだけれど、新しいことにぶつかると不安定になる者が今度の級にも数名いた。友だちとうまくあそべなくて心細くなる、腰かける時いすがみつからない、クレヨンの箱がひっくり返ってしまった、後から友だちがおした、はきかえる靴がすぐ見つからない、おべんとうが全部たべられない、予防注射がいやだ、小さな事件は前ぶれなしにつぎつぎとある。そんなことがあるたびに、はりつめていた心の緊張の糸がプツンと切れてしまったように、どうしようもなく泣くことが最初のころはよくあった。けれどこういう人たちもやがて幼稚園の生活になれ、次第に友だちができて、友だちとあそぶことが楽しくなっていくうちに、小さな出来事はお互いにがまんしていったり、困ったことがあっても自分たちでその処置を考えていくように成長するのが楽しみでもあった。

一方三年保育からの人たちは前の一年間で園の生活習慣やきまりは一応身につき、教師や友だちとのつながりはできたものの、四才児の級になって急に大勢の級になったことに不安定を感じる者もあった。また、今までのようにひろびろとしたスペースで、玩具を数

の上からも充分使ってあそべなくなって、勝手がちがってしまったり、遊具や玩具を今までのルールに沿って使ってくれない新らしい友だちのことや、さまざまなことでやはり初めは困惑したことも多い毎日を過していた。

しかし、だんだん日が経ってみんなの生活が何とか軌道にのってくると、大勢の級の中でいろいろな友だちとあそんだり、いろいろな経験をする楽しさもましてきた。記録をみて、こんな状態であったことを思い出しながら、その頃一日をどうやって過していたかをふりかえってみよう。

・・・・・・・・・・♧・・・・・・・・・・・♧

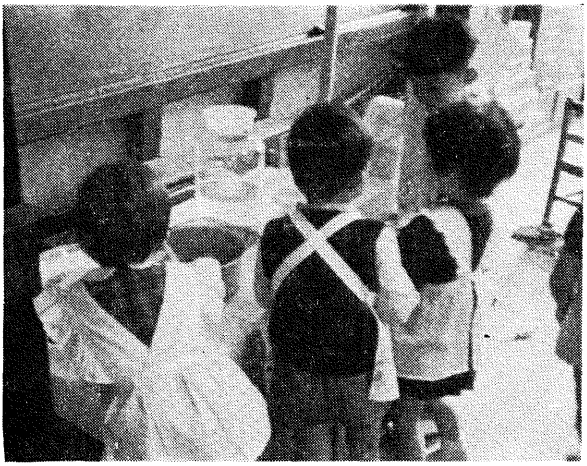
○五月末日のある一日

・九時　登園

登園時間の早い子どもが数人、八時半少し過ぎになると元気に「おはようございます」といいながら部屋へ入ってきた。子どもは手を洗ったり、うがいをしたりする。私は「Aちゃんたちはいつも早いわね」と話しかけたりするかたわら、部屋をいそいで整える。数分のうちに、また何人か登園してくる。まだ母といっしょに部屋にきて挨拶をうながされている子どももいるし、OとNのように手をつないでとびこんできて「僕たちいっしょにきたんだよ」とうれしそうに報告する者もいる。

Sが父に部屋まで送ってもらって入ってきたが、父がSをおいていこうとすると心細げな表情をしている。私はSと父の関係を、Sと教師とのつながりに移行するため、Sのそばへ行って手をつなぎながら、保育室で飼育しているおたまじゃくしやざりがにを見に行った。そこでは五〜六人の子どもたちで話がひとしきりにぎやかにはずんでいる。「おたまじゃくしね。しっぽが少し短くなったよ」「足も出てきたよ」「あら、ほんとう」「あ、こっちのも」「えびがにがはさみふりあげたよ」「ざりがにだってばー」Sも、はじめはだまっておたまじゃくしやめだかの泳ぐのを見ていたが、やがて仲間に加わって話をしだした。

その間にも幾人か登園。次第に人数の多くなった保育室の中では、ままごと・



おたまじゃくしやざりがにをみる

つみ木・絵本・木製の汽車などであそびがあちらこちらではじまった。庭へ出た子どもたちはブランコ・ジャングル・砂場・自動車など思い思いの遊具であそんでいる。子どもたちは楽しそうに遊具・運動具であそんでいるけれど、まだ友だちとあそぶということ自体よりも、中心的なのは、物、つまり遊具がおもしろいからあそぶというようすがみられる。例えばIとKと他数人で自動車をおしていたと思ったら、「Iちゃんばかり乗って僕はちっとも乗れないよ」と口をとがらせてKが言いにくる。Iに「代りばんこね」と言っていると、今度は部屋の中でNとAが何か言い争っている。「僕がつなげた汽車をNちゃんがとるの」「だって僕、たりないんだもの」友だちとあそぶことがあそびの中心なら、玩具の方はお互いにゆずり合う気持ちがあるけれど、今はまだ玩具が珍らしく大事なので、なかなか友だちにかせないのだろう。しかし一応双方の言い分を聞けば、あとはたいして悶着なしにまたいっしょに遊びを続けるというのも、子どもだからできるのであろう。

一番おそく九時三〇分頃登園したK子や、私が部屋にいると何となく傍にいるM子・A子などを誘って山の長いすべり台をしに行った。カーブのある長いすべり台がおもしろくて、みな何回も並んですべる。Mはかいだんを上るのがちょっとまわり道なので、すべり台のすぐわきの生け込みを上ろうとしたが、規則違反というので几帳面なTにすぐとめられる。

「信号が青になりました。すすめです。赤です。とまれ」とすべ

お山のすべり台やつりわであそぶ

りながらやり出したら、すべり台の途中でストップすることがおもしろくて、かいだんを上ったりすべったり、上ったりすべったりと熱中している。私もいっしょにおもしろく遊んでいるうち、つりわにぶらさがっていた子どもたちが「つりわ高くして」と呼びにきた。つなを短くして、少しつりわを上げてあげる。暫くすると今度は「先生、お山へクローバーとりに行かない？」とN子やK子たちが誘いにくる。「それじゃ、おままごとのうちのかごをかりて行きましょう」とかごを持ってつみ草に行き、初夏の太陽をいっぱいにあびてひとときを過す。つみ草をしたり、蝶を追ったり、ジャングルのてっぺんに上って遠くを眺めたり、思い思いあそぶので「先生はちょっと下のお庭の方たちが何しているか見てくるわね」と言って、私だけおりてきた。

砂場あそび

砂場の人たちのようすを見に行くと、「あら、あら、お水いっぱいじゃない。まあ、お靴が泥々。あら、Kちゃんは顔まで真黒よ」と思わず大声がでてしまったり、ふきだしてしまったり。砂場に熱中していた子どもたちは、言われるまで気づかないで水をどんどん注いで工事していたけれど、お互いの顔を見ると泥だらけなので顔を見合わせ、ちょっとてれくさくなった。

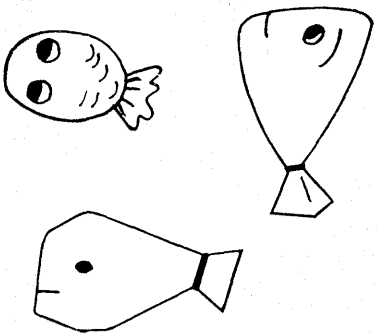
・十時過ぎ　絵をかいたり製作をしたりする。

砂場の黒ン坊連中を部屋によんで、汚れた前かけをとったり靴下を変えたりし、手や顔もタオルで拭くとさっぱりときれいになった。その間、部屋で絵をかいていたT子たちをみて刺激されたKが「お絵かきしよう」と帳面とクレヨンをだしてくると、他の子どもたちも「僕も」と続いて、自由画帳をとりだしてきた。私は、先にはじめていたT子たちの絵をみたり、そこに日付けを入れたりする。

さんさんごご思い思いの遊びが展開しているので、その間に私はこの間からとりかかりだしていた水族館あそびのための製作活動の一こまとして、今日は空袋利用のさかなをつくろうと、そのための材料を机の上にひろげはじめた。時間は十時少し過ぎである。二つ連ねた机にビニール被をかけて、マジックインキ、ビニールテープ、空袋、パッキング、モールなどをだした。ままごとの場からそのようすをみていたN子は「何するの？」ときいた。「あのね、この袋でお

魚つくっておさかなつりしてあそばない」とN子だけでなく他の子どもにも誘いかける。Y子やMたちはすぐに「やる」「作る」ととんできたのに、N子は私の行動に関心を示したにもかかわらず「やらない」という。おやおやと思いながら「どうして？」と聞いても「どうしても」という理由。この子は二年保育から入園した子ども だが、まだ日が浅いので絵画製作の面の興味は出ていないのだろうか。

もう少したったらまた誘ってみようと考えて、先ず机のまわりに集まっている数人に、つくり方を説明しながらいっしょにやり始める。空袋の中にハッキングをつめてある程度ふくらみをもたせ、次に魚の胴体としっぽの部分の区切りができるようモールか輪ゴムでとめてから、マジックインキで目や口をかいたり、色をぬったり、うろこをかいたりする。



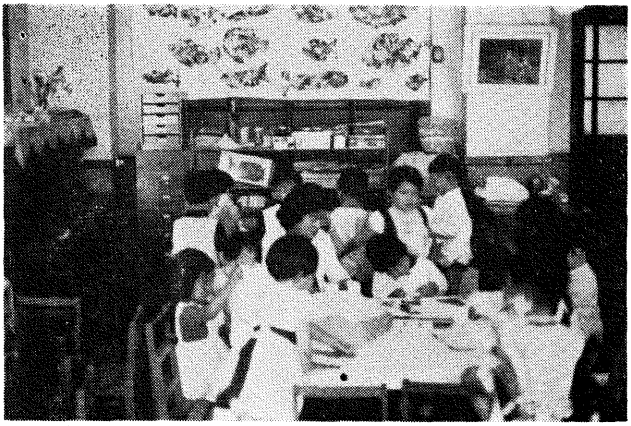
空袋利用の魚

比較的、地のきれいな絵からの空袋を選び、要領よく目をつけてすぐでき上る子どももいれば、色のある袋の上にまた一生けんめいマジックで色を重ねている子どももいる。

庭であそんでいた女児が五〜六人入ってきて、「何つくるの？」「やりまーす」と言って製作をやる意欲を示すので、その人たちにもつくり方を説明する。

一方、先にとりかかったグループではぽつぽつでき上る人たちもあり、「できた」「私の、赤いお魚」「私のは青いのよ」「もう一匹つくろう」「私も」「あのね、この前の日曜日ね、お父さまと水族館に行ったら、きれいなお魚が一ぱいいたわよ」「僕も前に行ったことある」と自分たちのつくった魚を中心として話がはずむ。

魚が幾つかできると「お魚はどうする？」「お魚つ



製作・お魚をつくろう

できた魚を釣ってあそぶ

りしたい」という声も聞え、床上つみ木でつり堀をつくってそこへ魚を入れ、つり竿やあみを出して、魚つりあそびがはじまった。「つれたー」「わあ、大きいのつれた」「やらせて」などにぎやかになる。庭であそんでいたグループもその頃部屋へ入ってきて、つり堀の方へ「やらせて」とか製作の方へ「お魚つくる」と集まってくる。できた子どもには後始末をするように促がしたり、いっしょに片づけたりする。N子はみながおもしろそうに魚をつっているので、だんだんやりたくなってきたらしいが先程やらないとはっきり言ったので、ちょっと具合いがわるそう。でももう一度すすめると、今度はうれしそうにやりだした。おとなしいE子は何となくもじもじして、みなのつくるのをみている。「Eちゃんもお魚つくってね」というとこっくりとうなづいた。この子はまだこちらから働きかけないと、やりたい気持ちがあっても自分からは積極的な行動はとれない。

できあがった子どもたちは、魚つりをしたり、また庭へ出てあそんだり、部屋で黒板に絵をかいたり、つみ木やままごとなどをしたりしている。

・十一時三〇分頃部屋を片づけておべんとうの用意をする。

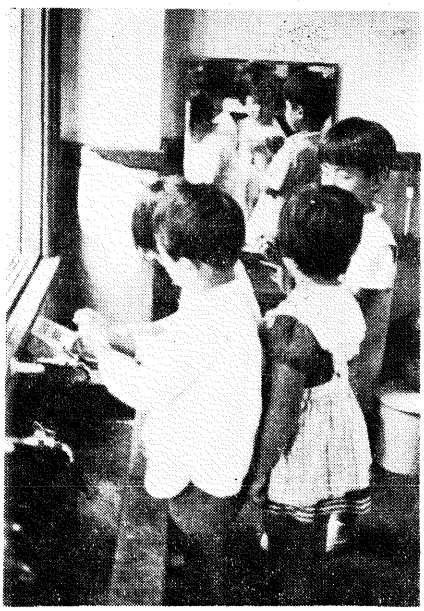
ひとわたり製作も終りになった頃「お片づけしましょう」とみなに知らせ、製作でパッキングがいっぱい散らかった床をはいたり、セロテープやマジックインキを所定の場所に片づけたりする。マジックインキはふたがとりばなしでどこかへ飛ばしてしまっているのもあるし、紙くずも乱雑に散らかっている。

自分のはさみとかクレヨンは比較的よく片づける子どもも、まだ共同のものを仕末する意識は少ないし、四才になって日も浅いから

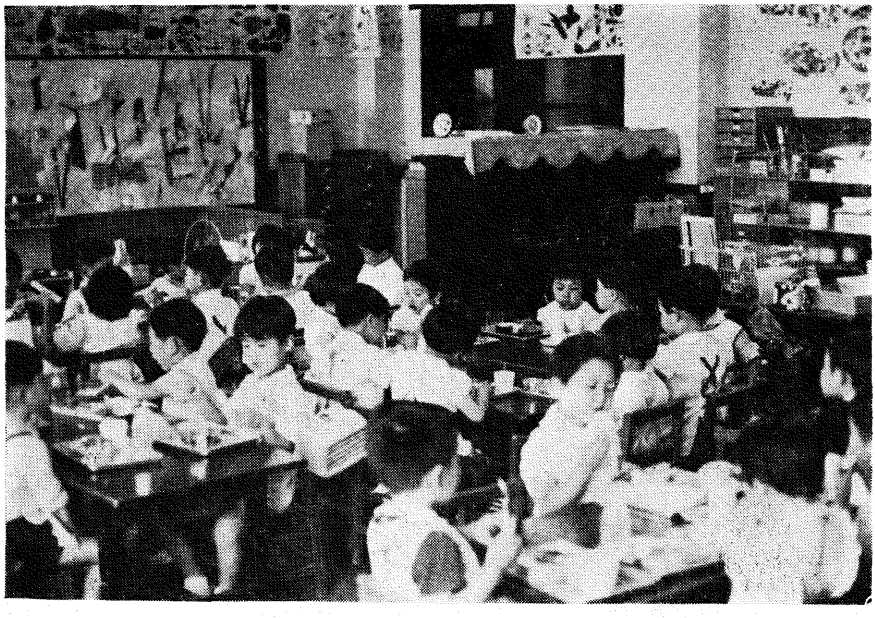
無理はないと思うけれど、それにしても大勢だと随分散らかすことと妙なところに感心してしまう。

それでも散らかす人も多いけど、片づける時も大勢である。十分もすると部屋はきれいになったので「おべんとうにしましょう」と声をかける。「林の組、おべんとう」「おべんとう」とはずんだ声がひびき、並んで手を洗い、うがいをしてバスケットをとりにいく。水道のところで「Yちゃんがおすの」「ちがうよ、Hちゃんだよ」という声。また、にぎやかなこと。

私は机の上をふいたり、おぼんを配ったりする。「先生、おぼんくばらせて」とよってきた数人に「これ、Tちゃんよ」「これはMちゃんのよ」と名前を知らせながら、配るのを手伝ってもらう。突



食事の前に手を洗い、うがいをする



楽しいおべんとう

然A子が大声で泣き出した。バスケットを持ったまま、坐るところがないといって泣いている。泣き声が大きいので他の子どもがびっくりしている。よく探せばちゃんと椅子は空いているのに、困ったことがあると問題解決を考えず必ず泣くA子、いつまでもこれが続いたら本当に困るのに……。

A子の座席をみつけてあげて、おべんとうのつつみのほどけない人のを手伝ったり、お湯や牛乳をついであげたりして、やっと準備が整った。

声を揃えて「いただきます」私もいっしょに食事をしながら、みなの楽しそうに話すのを聞いたり、相づちをうったりする。

・・・・・・・・・・・・

食事のすんだものから、はをみがき、後片づけをしてまた各自あそびだす。Kは早くすんだYに「バトミントンとっておいてね」と頼んでいる。「いただきます」をしてから十分位で食事のすむものもいれば、いっこうにはかどらない子どももいる。食事に要する時間は随分さまざまだ。これは幼稚園だけではなかなか変えられないので、家庭とよく連絡をとっていかなければならない問題である。

やがて⅔位の子どもがおべんとうがすんで庭や室内であそびだすと、U子は「もうたべられない。のこす」と言って落ちつかなくなってしまった。U子のおべんとうの量は多すぎる程ではなかったはず。友だちがあそびだしたので食事をつづけることに気持ちがいかなくなってしまったためであろう。「もうちょっとだからがんばっていただいてね。Y子ちゃんもまだいただいているわ。二人ともがんばってね」とはげます。

はとぽっぽ体操

庭であそんでいたS子たちが「先生、花いちもんめしない？」と誘いにきた。

「もうじきU子ちゃんたちがおべんとうすむから、そうしたらいっしょにあそぶわね」「じゃあ、お庭にいるからきてね」と言ってまた外へいった。私はまたおべんとうのおそい子どもをはげましたり、おぼんの後片

づけをしたりする。

みなが食事がすみ、後片づけも終ったので先程の花いちもんめのグループに入れてもらったり、鬼ごっこをしたり、鉄棒を手伝ったりする。やがて一時になるとレコードがなった。

・一時　体操

このレコードは体操の合図であり、四方八方から子どもがかけつけてきて、それぞれの級の前に整列する。はとぽっぽ体操をしてから、その後少し庭を歩いたりする。

・一時三〇分　帰園

ままごとや砂場などのあそび場所をみなで片づけてから、帽子やバスケットをもってきて帰りの支度をする。

全員が席についたところで今日つくった魚をみたり、「きれいな魚」のうたをうたったりして後、「さようなら」の挨拶をして帰る。私は子どもを玄関まで送り出し、迎えの母にわたして今日の一日の保育は終りになった。

・・・・・・・・・・♣・・・・・・・・・・♣

ここにのせたのは、一学期の中のある一日の流れである。この日は突発事故もなかったし、一学期としてはスムーズに流れた方かもしれない。

教師は計画をもっていても、子どもの側がなかなかそれにのってくれないことも最初のうちは多いし、今なら笑ってすませるようなことも、はじめはお互いに気持ちの通じ合いが少なく、勝手がわからなくて、些細なことで流れが中断してしまったり、横道へそれたりもよくあった。

やがて一年が経ち、五才児に成長する子どもたちは次第に友だち関係も高まり、教師とも親しみがましてきた。

しかし二学期も三学期も、一日の保育の流れというものは、ここにあげた一日と同じような経過をへて流れていくことに変りはない。ある一日はとても気持ちよく楽しく運べることもあるし、ある日は二〜三人がこの主流から違う方向へ流れていってしまうこともあるし、またある日は全体の流れがとどこおってしまう出来事のあったりする日もある。

どうしても四才の時期はまだ子どもも形がきまらず、いろいろ変りやすい年令であるし、教師の側もこういう子どもたちだから計画通りを重んじて先ばしってはいけないと思うし、そう思いすぎてある面は足ぶみをしていることがあるかもしれないし、方向づけがむずかしい年令である。

学年末になって何とか一応みなも安定し、生活のリズムもできてきた。原稿を書きながら、年長組になったら、教師の計画によって進行する保育の流れ以外に、四才児の経験を基礎として、今度は子どもの側の発意によって高まっていくいきいきした保育の流れがもちたい。教師はアドバイスはするけれど主流は子どもたち自身によって運ばれる日、そんな日をもちたいとふと思うのである。